

講演

『広島大学二十五年史』の編集活動を振り返って

頼 祺 一

本日は第一回の研究会にご参加いただきましてありがとうございます。頼でございます。来年が広島大学の創立五十周年に当たるということで、その記念事業の中に五十年史の刊行が位置づけられております。今回の五十年史の編纂にしましては、編集専門委員、特に幹事会の皆さんには積極的に助けをいただいで、できるだけ良いもの作っていただくということで、頑張っております。編集室が正式に発足して、まだ三ヶ月ですが、幹事会を毎月開いておりますし、それからこのような研究会もやろう、独自の紀要も発行しようというように話が膨らみ、かつ具体化してまいりました。

統合移転の時に、かなり盛大に記念式典が行われました。その式典の後、元の二十五年史編集委員長の松岡久人先生からお電話をいただきました。きまして、「廣大、今何やっとなるんか。もう五十年史の仕事をやらにゃいかんのじゃろうか」というお叱りを受けました。私はかつて二十五年史編集室の専任教員として、松岡先生は直接の上司でしたから、これはこたえました。ただ私も以前から、そういう時期だということに薄々気付いてはいたのですが、自分から言い出すとヤブヘビになりは

しないかと思って黙っていたんです。しかしやはり年史を作ろうということが上層部で決定されました、私に編集委員長のポストが回ってまいりました。

今回は創立五十周年記念事業委員会というのがございまして、事務局には創立五十周年記念事業推進事務室がございまして。記念事業委員会には小委員会があつて、小委員会の下に全学事業として、この五十年史編集の部会、式典記念祝賀会の部会、募金を行う財政部会、地域と協力したイベントの部会、ロゴマーク制定の部会、という委員会があります。昨年の秋ぐらいいから五十年史編集の話が本格化してきました。今年にはいつて編集室ができ、四月から活動をはじめました。まずは、仮称ですが、図説・年表編を一冊作って、来年十一月の記念式典で配布することになっています。

二十五年史の編集室が作られた当時、私は文学部国史学教室の助手をしておりまして。先ほども申したように、国史学教室の松岡先生が二十五年史編集委員長をされておりました、学内の二、三の方と相談されて、私が専任でやるように、という指示を受けました。身分は大

学教育研究センターの講師でした。また副委員長が、教育学部の井上久雄先生でしたので、教育学部から寄田啓夫さん（現香川大学）を助手として迎えて、専任スタッフ二人ということになりました。それに、松村いく子さんが事務を担当されました。松村さんの身分は、事務補佐員でした。しかし、ある段階で、こんな辛い仕事を補佐員じゃやっとならね、正規にしてくれという直訴を受けて、委員長が学長や事務局の方へ働きかけて、正規の事務官になってもらいました。

私は二十五年史が完成しないうちに、総合科学部に移りました。たまたま総合科学部で日本史の教員が必要だということになり、二十五年史編集委員でもあった渡辺則文先生が公募審査を経て採用して下さいました。その時に当時の今堀学部長から「君だけは来て欲しくなかった」とはつきり言われました（笑）。なぜかという、文学部のようなところで教育を受けたような者は総科では欲しくないんだ、ということですね。今堀先生らしい言い方だと思います。まあ、今堀先生を昔から存じ上げておりましたので、別に怒りもしませんでした。確かに日頃から、英語で日本史の授業ができるような人が欲しかった、ということをおっしゃっていました。しかし、その後二十数年経つても、総科に、英語で日本史の講義ができるスタッフがいるということには聞いたことがないんですけども（笑）。そういうことがあって、昭和五十三年の四月から総科に移りました。松村さんもその一年後に他の部局の事務官として配置換えになりました。

今回の五十年史の場合は、全学に空き定員がないということで、三澤さんが助手、それから小宮山さんには誠に申し訳ないけれど教務補

佐員というところで、一ランク下げたような感じになってしまいました。しかし、事業が継続している間にそれぞれの業績を積んでいただいて、講師なり助手なりのポストにさせていただきたいとは考えています。

前回の二十五年史は、広大では初めての年史の編集でした。創立二十五周年の記念事業として年史の編纂が計画されました。昭和二十四年五月が創立記念日ですから、四十九年五月までに年史を作れということで、四十七年に編集委員会が組織されました。各学部・センター・事務局・学生部等から一人ずつ編集委員が出られて委員会を作り、そこで委員長が互選されました。そして、委員会の責任において、編集室を作つて、スタッフを二人置くという方針を決めて、事務局に申し出る、という積み上げの方式でした。今回とはまったく逆のような所があります。今回の場合、学長が私に委員長をやれということで、委員会の互選ではありません。委員長の選び方一つ取つても全然違うわけですが、大学の運営もそれだけやり方が変わってきた象徴かとも思っています。

前回の時は、委員会でも二十五年史を三冊作成することが決定されました。つまり、広大の前身校の歴史を書く包括校史編、各部局の変遷を書く部局史、そして全学的視点から書く通史編の三冊です。叙述の対象は昭和四十九年の三月まで。総合科学部は予算の関係で四十九年五月に出来ますので、総合科学部が作られる所までが対象になります。移転は四十七年に決定しております。全学の改革委員会あたりが動いて、大学改革の第一段として総合科学部ができた、というふうに私は認識していますが、そういう時期を一つの区切りとしています。だか

ら、区切りとしては非常に良かったんじゃないか、と考えております。これらの三冊を作る過程については、それぞれの後書きに、松岡先生の名前で非常に詳しく経過を記しておりますので、もうあえて繰り返しません。部局史の編集方針については次のとおりです。

○わが国の高等教育機関の中における、あるいは広島大学の中で各部局の特色を出すようにする。

○大別して、総説部分と学術・教育史部分とする。

○総説部分は、部局の創設・沿革・現状を大観する。

○学術・教育史の部分は、包括校時代をも含めて、研究・教育活動を歴史的・学問的に位置づける。

○現在の問題点も出す。

当時は広大紛争の余燼冷めやらぬ頃でしたし、移転に際して様々な矛盾も抱えていましたから、記述は相当真剣に、気を遣って取り組んでいただけだと思うわけです。包括校史、通史についても、ほぼ同じ方針で編集しました。そして、図書館のご厚意で、三階の二十六㎡の部屋を編集室にあてていただきました。その時に、先ず最初に入れたのは、机三つとロッカー一つ、ガスストーブとポットくらいだったと思います。だから今の編集室を見たら、私はもう夢物語みたいですね(笑)。コンピュータはある、ソファアはある、会議もできる、というような状況ですから。その後、部屋が狭くなったので、図書館の一番隅の物置になっていた所を空けてもらって、別室を作っていただき、そこを執筆の場所と資料置き場にしました。最初にあてがわれた三人一緒にいる部屋は、狭くてどうにもならないわけです。ですから環境

的には良くありません。でも当時は決して悪いとは思いませんでした。それが当たり前のように感じていましたから。

一番最初に手を付けた作業は、広大関係の年史がどれだけ出ているかを調査することでした。同窓会が盛んな所はよく作っておられます。一番活発だったのは、広島高等学校です。ちょうど当時、教養部に――教養部は広高が母体となっていますが――、松浦道一先生がいらっしやいました。松浦先生は西洋史の先生でしたが、流行歌で日本の近代史を講義するという余技をお持ちで、いろいろな面白いことに関心がある方でした。したがって、非常にユニークな広高の五十年史をお作りになっています。同窓会の呼びかけで、当時の学生生活を彷彿とさせるようなものをたくさん集めておられます。それから高等工業、工学部の前身の高等工業専門学校の年史ができていました。学校教育学部の前身になる師範学校は、明治の初めの創設で一番歴史が古いのですが、資料はあまり多くはありませんでした。それから高等師範学校・文理大は戦前に確か一冊作っていたと思います。文理大独自のものはなかったかもしれません。そういうことでほとんど何にもない状態なんです。これらのものを参考にしながら、どういうものが作れるか、ということを考えました。

寄田さんといういろいろ相談しているうちに、これは案外面白いかもしれないと思うことができました。実は、我々は包括校史に一番熱を入れたのです。部局史は各学部にお任せする、通史は広大の二十五年なんか大したことはない、とよく言いながらやっていたと思います。広大の包括校には、高等師範学校、文理大、高等工業専門学校、広高と

いった学校があります。それから、山中高等女学校が母胎となって終戦直前に広島女子高等師範学校ができます。これは東京、奈良に次ぐ女高師です。それから広島師範学校。青年師範学校が戦時中にできません。広島市も工業専門学校を作っています。それから医学専門学校が原爆が落ちる直前に開校式をやっていますが、これが戦後広島医科大学になります。したがって、医学部の包摂が一番遅れるわけです。そうすると、広大は教育の総本山、西の総本山みたいなことを言われているけれども、明治以降の高等教育の諸学校が全部あるということです。いわゆる帝国大学はありませんでした。

そういうことで、本気で資料を研究していったら面白いんじゃないかということ、寄田さんと手分けをしました。資料調査は一緒にしましたが、寄田さんにはご専門の教員養成系に関する部分を担当してもらおう、他の広高とか、工業専門学校とか、医科大学とかを私が担当するという、大まかな分担をいたしました。結局執筆も、寄田さんが教員養成関係を、私がそれ以外を書くことにしたわけです。

資料収集をやってみて分かったことは、原爆被災ということもあって、やはりほとんど当時の資料は残っていない、ということでした。大学とか高等師範学校とか高等学校では、学籍簿というものを作ります。高等師範学校についても、学籍簿などを集めるのが先ず基本だと思っただんですが、これが案外集まりませんでした。唯一、教育学部の部長室に、広島高等師範学校・文理科大学の一覧がひと揃え揃っていて、それを全部コピーさせていただきましたが、他にはそれだけ揃っていないところはありませんでした。広高なんかも全部揃いません。

広高は後に、皆実分校・教養部になります。教養部の編集委員でした後藤陽一先生は、なぜ森戸学長が教養部を皆実町から本部キャンパスへ移したのかを是非明らかにして欲しいとおっしゃってました。そこで後に森戸先生にインタビューをしたんですが、明確な回答は返ってこなかったと記憶しております。

昭和三十年代に私は皆実分校内の薫風寮という寮に住んでいました。原爆で倒壊したのを復旧した広高以来の木造二階建て四棟の建物です。十五m以上の風が吹いたら退避しろというマイクの放送があるくらい老朽建物でしたが、大事なものだけは、戦前に御真影を収めていた奉安庫の中に入れていました。そこに資料があったのです。また移転の後に、薫風寮の寮務日誌みたいなものが、広島のパートの古本市に出たことがあります。私は、今でもしまつたなと思うんですが、その時は買いませんでした。だから今でもどこかにある筈です。そして、移転の時に広高関係の資料というのはほとんど処分したということを開きました。学籍簿など新制大学の移管に必要なものだけを移管したということですから、今でも総合科学部の倉庫には、広高関係のそういうものが残っている筈です。

原爆で被害を受けなかった資料には、高等工業のものがあります。高等工業の入口にはりっぱな奉安庫があり、原爆にもびくともしませんでした。中ももちろん焼けませんでした。この中の資料は全部残っています。戦後もおそらく移転まで、大事な資料は全部入っていた筈です。それから、高等工業も原爆で倒壊したけれども火事にはあっていません。だから資料はかなり残っており、非常に良い保存状態です。

た。したがって、その資料は相当利用させてもらいました。

肝心の高等師範・文理大は原爆で焼けています。疎開した資料も、戦後に事務室が火事になり、ほとんど焼却してしまっています。当時理学部の倉庫に、火事から何とか救い出した焼け焦げの資料がありまして、これだけは二十五年史の部屋で保管しないと捨てられてしまうと思つて、預かりました。それが一括して、今の編集室にあります。

この中には、戦前の記録がかなりあります。戦時中に被爆した留学生に関するものをはじめとして、戦前のいろいろな記録もあります。いわゆる一覧だけじゃなくて、そういう学生の生の声が聞こえてくるような資料も何とか残っています。しかし、一番欲しい庶務日誌のようなものはありませんでした。文部省との往復書類を綴つたものも保存されておりませんでしたので、これで歴史を書くのは大変だなあといいことになったわけです。師範学校関係のものは、その後何回も移転してきますから、資料が散逸してしまっていました。

このように学内の前身校の記録を集めるのが、一番目の作業でした。これらは目録を作つて残していますが、全部が全部ではありません。だから今、目録と照合して現物があるのかどうかは、五十年史編集室がしなければならぬ最初の仕事だと思ひます。県でも市でもどこでも同じですが、近代資料の保存は非常にいい加減で、もう散逸してしまっています。だから広大でも、昭和二十年代、三十年代の資料がほとんどないという状態になっています。

私が一番心残りなのは山中女学校のことです。この山中女学校の同窓会の理事長をしていた小原さとしさんという方が、たまたま竹原へ

疎開され、そのままずっとお住まいで、同窓会の橘香会の中心となつて活動されていきました。私も子供の頃からよく知つていて、「山中のことだけは頼みます」というふうに頼まれました。それで当時、山中トシ先生が山中寮という女子寮に住んでおられましたので、山中先生に聞き取りをした所、手を合わせて拜まれたんですね。今でも忘れませんが、「頼む。何とか山中の名前を広大に残して欲しい」と。実はその約束とは本部の記録にあるんですね。当時の補導部長の平塚錦平さんという方がいらつしやいまして、その時に山中先生と覚え書きを取り交わされたんですね。そこには五つ程項目がありますが、その一つに、広大になつても山中という名称をどこかに残して欲しい、ということがあります。しかし、それは国家としてはなかなか難しいことらしい。そこで事務局は非常に苦労したけれども、山中寮という形で残しました。その後西条に移転すると、たまたま地名が山中だったから、山中池ということでごまかしているわけで、私としてはほとんどないことだと思ひます。

高等師範とか山中女学校は、原爆で多くの人が亡くなっています。山中高等女学校では、女高師の卒業生である元附属学校の小野文子先生が中心となつて、復元作業をされています。貯金通帳しか残つてなかつた学生もいますが、それを手がかりに全部の被爆者の復元をされました。結局、大学移転の最後の締めくくりで、山中寮が取り壊されて、碑も福山分校に行つてしまいました。跡地にかろうじて、山中高女の発祥の碑だけは残されて、小野先生もこれで私の役目は終わりました、とおっしゃっていました。

山中先生としては、国がまさかこんな扱いをするとは思わなかった、と一生怨んでいらつしやったように思います。それはどうしてかという、山中先生のお父さんが創立した山中高等女学校は、広島では県女よりも名門だったわけです。明治二〇年に創設されて以来、女子教育の中心になっていたのに、たまたま国家に寄付したばかりに、戦後ひどい目にあつて何も残らない。それに対して、多くの専門学校が戦後、大学になつてきているというような怨みの気持ちも、おありになつたと思います。それで、何とか頼みますとおつしやられたのだと思えます。山中に関する相当大事な資料は資料編に入れています。

これまで山中女学校の話をしてきましたが、それぞれの学校にはそれぞれの思いがあります。そういうことを踏まえて、いろいろな所で資料を集め、聞き取りをして資料を残しました。そういう形で編纂して、包括校史が出たのが五十二年の一月、編纂室ができてからちょうど五年目です。できるだけ今のうちに明らかにしておこう、資料についても基本的なものを残そう、と相当情熱を傾けました。各校の記述の後には大事な資料をつけています。ありがたいことに、尚志会が文理大の七十五年史を作られた時、歴史の部分は全部これをそのまま載せられて、あとは回顧録という形にされました。その段階での決定版じゃないかということだと思っています。

部局史は、大まかな項目を立てて、枚数をそれぞれ割り当てて各部局にお任せしたので、バラバラです。統一をとうろうと思いましたが、とてもできませんでした。ある学部選出の委員の先生のように、絶対一字も手直しを許さないと強硬に言われる方もいらつしやいましたの

で、それぞれ特色があると思います。一応総説部分で、創設、沿革、概観と研究・教育活動を綴ることにしました。それぞれの分野、あるいは講座ごとに、一人一人の教授の名前を挙げて主な業績を書かれる所もあれば、そうではなく歴史的な叙述で位置づけられている所もありました。原稿は各部局の委員の校閲を経たものを、松岡委員長が目を通されました。それを調整して、部局史が出たのが五十二年の三月です。実際は五月くらいになつていましたが、日付としては三月。これもやはり五年目、包括校史とほぼ同時です。

そしていよいよ通史だ、といって執筆しかけた時に、私は総合科学部に移りました。あとは寄田さんが一人ですつと担当されたわけですが、既に執筆分は決めていました。通史についても、寄田さんが教育的な沿革部分を取り上げ、私が学生関係、紛争、大学改革のあたりを執筆いたしました。今思い出せば若かったと思うんですが、二人ともかなりの分量をいろいろ書いています。私は総合科学部に行つてもまだ書いていました。書き上げた原稿は、委員長の松岡先生と副委員長井上先生とが校閲するという形で、大幅に削られた所もあります。しかし、だいたい我々が書いたものを印刷していただきました。

当時、学生関係の資料を残していたのは、教養部、今の総合科学部です。この中にはいわゆる補導部関係のピラとかすごい資料が残っていました。紛争時は本部の事務の人が至る所でピラを集めました。そのピラの綴りがありました。広報委員会にも基本的なピラは全部ありました。私たちは先輩から、警職法の時、広大の学生でピストルをポケットに忍ばせた者がいるというような話を聞いていましたが、も

ちろんそんな記録はありませんでした。しかし、警職法の時の学生運動の記録などが残っていました。散逸したものも多いでしょうが……。

戦前については、一九三〇年代の広高や高等師範の学生運動についての原資料はまったくといっていい程残っていませんでした。したがって、公安当局が出して復刻された学生記録みたいなものや、文部省が発行した、毎年の広大の動向や学生の記録をとめたもの等を参考にしました。それに加えて、聞き取り調査を行いました。

戦後のことはもう生々しいので、学長以下の聞き取りはほとんどしてません。広大の創設に関わるまでのことや、森戸先生を呼んでくる以前の経緯あたりを主に聞き取りでやりました。その時のテープは全部残っています。そうして、五十四年一月、つまり七年目に寄田さんがようやく通史を完成させました。

私が通史の中で一番力を入れたのが、資料編の学生生活、学生運動に関する部分で、資料編の大半を占め、三〇〇頁ぐらいあります。ピラや新聞記事を中心にしていますので間違いが多いかもしれませんが、一番役に立ったのが、図書館で保管されていた「広島大学新聞」です。全部マイクロフィルムに撮りました。それから、当時はまだ「中国新聞」のマイクロフィルムが出ていませんでしたので、「芸備日々新聞」と「中国新聞」を見るために呉の図書館に何週間も通いました。地方版も要るといふことで、三原の図書館で「朝日新聞」の備後版などを見ました。今は新聞がマイクロ化されているので、非常に楽だと思えます。これらの記事で再構成しました。

私は資料編に特色を出したつもりですが、これを誉めて下さったの

は関正夫先生だけです。今堀先生には、「頼君、面白くない年史を作りましたね」とたどころに切って捨てられました(笑)。今堀先生はその後、広島女子大に行かれて、女子大でも大学史を作られました。読んでみると、確かにユニークだけど、別に面白いとは思わな(笑)。これまた見解の相違だなあと思いました。「事務屋が喜ぶような年史は、面白くないですよ」と今堀先生は言っておられました。二十五年史は沿革については詳しく書きましたので、事務の方には案外役に立つ所があるかもしれません。関先生には、「学生に関する所は良い資料として残るでしょうなあ」と言われました。大学紛争に関する資料の主なものは、全部入れたつもりです。総合科学部にあった学生のビラは、確か全部マイクロフィルムに撮ってある筈です。

もう時間がまいりましたので、端折りますが、そういうことで何とか三冊作りました。その後、寄田さんも名古屋の方の私学へ就職があり、ホツとしましたが、年史の編集には身分の不安定さがついて回ります。今回の場合も学長、副学長が、ポストがちゃんといれば悪いようにはせんと言っておられますので、その辺の所を期待して、編集室員の方には自分の研究の業績もきちんと積んでいただきたい、と思っています。

二十五年史の時に、飯島学長が最初に次のように挨拶されています。資料保存の問題をちゃんと考えて欲しい、それから大教センターに二人を所属させる意味を考えて欲しい、と。大教センターは、広大のこととはあんまりやりたくないというのが一貫していますね(笑)。当時の喜多村先生とは仲も良かったんですが、喜多村先生の理想はもつと

別の所にあったように思います。そんな広大みたいな細かいことはお前らがやれ、とよく言っておられました。

資料保存に関しては、その後、広大に文書保存委員会というのが作られました。これは一つの成果です。しかし、これがほとんど機能しなかったというのが大問題です。この文書保存委員会は現在もまだあると思います。文学部の有元正雄教授が最初の委員長になられ、私も総科から選ばれて二、三年間、委員をしました。そこで文書館構想というか、大学資料室の構想を作りました。それで大学の移転に際して、図書館の中に作つたらどうかという意見があり、当時の図書館長に、簡単な見取り図みたいなものも含めて、設置の要望書を出したことがあります。結局、これは実現しませんでした。

それから、関先生もご熱心でした。初代の工学部長さんの所へ、関先生と私と二人で聞き取りに行ったこともあります。工学部の移転が完了した時、必要な資料を移した後に、高等工業、高等専門学校時代の資料が山ほど積み上げられていました。そこで関先生が有元先生に言つて国史の学生を動員して、歴史的に必要な資料を選択しました。その時残した資料がダンボール二、三十箱あったと思いますが、工学部のどこかに今でもある筈です。これもやはり、関先生のおかげじゃないかということを考えています。それ以外の資料は———、どうでもいい資料というのは本当はないんでしょうけれども———、廃棄というこゝとで、全部売却したんだと思います。

他の学部は移転に際してどうなつたかという、私たちにも責任があるんですけども、各学部とも相当処分をされています。移転の後、

どの程度残っているんでしょうか。私は総合科学部の二十年史の委員をやっていました、あの時にはまだ残っていました。総科の山本正男事務長と式部久元学部長の資料が全部保管されていました。山本さんの資料には、この資料をもし廃棄することを事務が考えられたらどここへ連絡してください、と横に貼っていたと思います。式部先生の資料は大きなダンボール箱で何箱かありましたが、非常にこまめで、教養部時代から評議員などを長い間されましたので、相当大学関係の資料がありました。

そういうわけで、今回の年史編纂の課題は、その作成が一段落したあかつきには大学資料室のようなものを設けていただいて、将来に向けた資料保存をしなければならぬ、と私なりに考えています。図録や年史の編纂は編集室に任せておけばいいから、むしろ私たちは、将来のことを考えなければならぬ、と今は思っています。

いろいろ思い出話もあります。寄田さんに、このような体験談をしていただくと、また違う話になるかもしれません。時間がきましたので、これで終わらせていただきます。

(らい きいち)

広島大学五十年史編集委員会委員長・編集室長、広島大学文学部教授

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第一回研究会（一九九八年五月二十九日）において行われた講演を文章化したものです。

(広島大学五十年史編集室)